

# 厚内神社史

木下 茂<sup>1)</sup>・持田 誠<sup>2)</sup>

Shigeru KINOSHITA and Makoto MOCHIDA, 2019. The History of Atsunai Shrines.  
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 19: 9-11.

## 「厚内神社史」の経緯について

浦幌町の厚内で、地域の歴史を調査されていた木下茂氏は、2018年に逝去された。博物館では、生前に木下氏より、厚内神社の歴史に関する原稿「厚内神社史」をお預かりしており、併せて厚内地区の歴史について、ご本人から聞き取り（仮調査）をしている最中でのことであった。その博識さ、地域の歴史に対する思いの強さに感銘を受け、本格的な聞き取り調査をしたいと考えていたところでのご逝去は、甚だ残念でならない。

本稿は、1992（平成4）年の厚内神社例祭に際して寄せられたもので、「厚内神社の推移に寄せて」という標題で、現在も厚内神社拝殿に、額装の上掲げられているものである。「厚内神社の推移に寄せて」は、厚内神社と厚内地区の沿革に関する、貴重な証言であり、浦幌の地域史にとって重要な資料となることから、ぜひ活字化して出版したいと博物館から申し上げ、その原稿をお寄せいただいたものであった。

現在、厚内神社は、対外的には齋藤兵太郎が京都伏見稲荷から分霊した稲荷神社を創始としているようである。しかし、木下氏の記述にあるように、もともと厚内地区には「山の神社」と呼ばれる川瀨勝太郎による社があったとされる。また、齋藤氏が稲荷神社を厚内に建てた時期についても、木下氏の記述と『浦幌町百年史』などの記述とは違いがみられる。木下氏は、町史における神社の沿革の記述内容や、川瀨の「山の神社」の存在が忘れられつつあることを非常に気にかけておられ、そうした思いからも本稿の出版を快く諒解いただいていた。

しかしながら、ご生前のうちにお預かりした原稿を出版できなかった事は、博物館として大きな責任を感じているところである。

また、当初の予定では、本稿を叩き台として、木下氏との議論のなかから生じた新しい事実や疑問点などについて、さらに本文を追加をした上で、新たに紀要原稿として掲載するはずであった。しかし、それが叶わなくなってしまったため、文責に原稿をお預かりした持田を加えた上で、修正を基本的な誤字・脱字の訂正のみにとどめ、参考写真を付した上で掲載することとした。本稿の内容について疑義がある場合は、その責は持田に所在するので、あらかじめ御了承いただきたい。

また、本文中に掲載した1955年の厚内神社の写真は、浦幌神社所蔵の写真をお借りした。原稿の入力にあたっては、厚内公民館の前出彰子氏に尽力いただいた。ご協力に感謝したい。

木下氏のみ霊の天上でのご平安を心よりお祈りし、本誌を捧げる。

（浦幌町立博物館学芸員 持田誠）

---

## 厚内神社の推移に寄せて

波高き太平洋を望み大木が繁茂する原始林この自然条件の厳しさの中、幕末のころより探検者の多かった昆布刈石や厚内海岸でしたが、明治三十年ごろより、厚内の地にも開拓の鍬が振り下ろされました。

日高の幌泉村より菅原重助氏が移住し、厚内にて駅通を設営したのも明治三十年であり、厚内にも徐々に人が住み始めた明治三十二年石川県能登より川瀨勝太郎氏が大津を経て移住、その後大津からの移住者によって農業、林業、漁業等が営まれたのです。川瀨氏は船大工として漁業の振興に寄与された一人です。

明治三十四年ころより、鉄道建設が進み厚内にも活

1) \*故人〒089-5865 北海道浦幌町厚内（2018年逝去）

2) 浦幌町立博物館 〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町16



図1 1955（昭和30）年10月15日、厚内神社新築落成記念で撮影された写真。（浦幌神社所蔵）

気が増し又、翌三十五年は日本中が日清戦争後の戦勝ムードに酔いしれて活気に溢れていました。厚内では鉄道の枕木製造や造船の船材等は、今村浅次郎を頭に厚内川を堰き止め、流送で大量の木材を搬出したのです。

この景気を機に、厚内の住人の数も増え始め、荒い仕事の作業安全、家族の家内安全等を願うためにも神社を建てたいと、川瀨勝太郎氏の胸に湧く思いは、即実行に移され、川瀨家の私有地に厚内の鎮守様として、厚内二十三番地の小高い山の上に社殿を建てて「天照皇大神」様を奉斎したのです。天照皇大神様とは「太陽神」であり、朝に昇り、夕に没して万物の命に恵みを与えくださる日本の最高神として、また、皇室の親神様でもあり、日本の守護神として、各村々にも鎮守の社が建設されたのです。

当時は「山の神社」と呼ばれ、例祭として春は四月三日、秋は九月四日に定めて厚内の市街地からも多数参拝者が訪れるようになりました。また厚内にも鉄道の開通とともに、明治四十六年には、斎藤家、大津家、水沢家など、大津村より移住し、漁業従事者の人口も増え、市街地にも神社の造営が叫ばれるようになりま

した。

大津蔵之助、斎藤兵太郎、川瀨勝太郎、水澤竹次郎、菅原重助の各氏为中心となり、大正六年十月十八日「伏見稲荷神社」が厚内の原野、厚内一九四番地の町有地に造営されたのです。

稲荷神社とは、古来から五穀豊穡と商売繁盛の神様として奉られておりまして、例祭は宵宮九月一七日、本祭は九月一八日としてにぎわいました。又、いつの年も大晦日から元旦にかけては、灯明がともされてきたのです。「山の神社」も昭和五年九月に、厚内十九番地の三「現在の木下家所有地」に移転改築、次いで、「山の神社」と「稲荷神社」の合祀は、戦時中の昭和十八年九月厚内全域の守護神として合祀、社名も「厚内神社」と改名されたのです。

その後、厚内神社も四十年の歳月が経ち、老朽化に伴い厚内神社建設委員会が設立され、川島信二氏を委員長とし、大阪（坂）岩吉、斎藤辰三郎、前川久治、水沢慶一、中村重次氏達为中心となり地域の氏子の方々の協力を得て、昭和三十年十月十三日に現在地チブネオコッパーの二十番地（当時松川家所有地）に新築移転を見たのです。昭和四十年六月十三日に、松川



図2 現在の厚内神社（2015年6月浦幌町立博物館撮影）

拓之氏より境内地の1,075平方メートルを寄進していただきました。

例祭日は九月十七、十八日と続きましたが、鮭漁の時期と重なり、氏子達（特に男子）が地元を離れる前にとの多数の希望により、昭和五十三年から五十八年まで七月又は八月と各々実施しました。しかし、度々例祭が変わるのも好ましくないということから、昭和五十九年より宵宮祭六月十四日、本祭十五日と決定し、現在に至っております。

厚内の最初の開拓者によって作られた、小さなお社から幾度かの変遷を重ね、平成四年九月には、創祀九十年を数えることになりました。いずれの時代にも、我々地域住民の敬神の念で灯をともし、厚くお守りして来た神社であります。

ここに、九十年の歴史を持つ「厚内神社」の、明治、大正、昭和、平成の数々の部分を重ねて記し、心をこめて奉納致します。

平成四年六月十五日（例祭日）  
厚内一区 木下茂



図3 厚内神社に掲げられている絵馬。製作年・製作者は不明。1909(明治42)年4月3日に川淵勝太郎が奉納している。現在、確認されている浦幌町内に残る寺社所蔵絵馬のなかでは、もっとも古いものである。  
(39.5cm × 57.0cm 厚さ2cm / 板絵墨画)  
(2017年11月浦幌町立博物館撮影)

### 追記

神社の記録が無く、私の記憶と、多くの長老、諸先輩各位にお尋ねして記した次第です。誤りがございましたらご指導賜りますようお願い申し上げます。